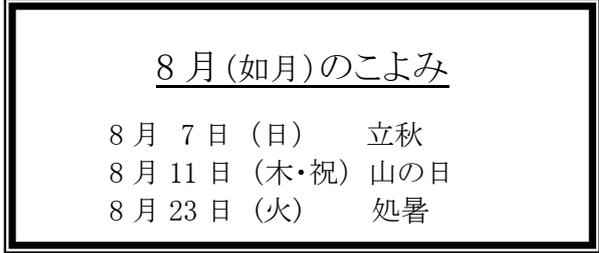
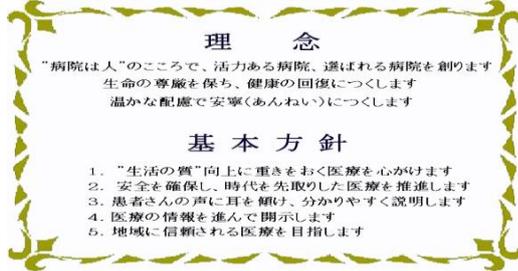




令和 4年 8月 1日 発行
KKR札幌医療センター
〒062-0931
札幌市豊平区平岸1条6丁目3-40
電話 (011) 822-1811
<http://www.kkr-smc.com>

(2022-6号)



好酒家の皆さんへ

腫瘍内科部長・消化器内科部長代行 曾我部 進

消化器の病気でアルコールといえば？みなさんまず思い浮かべるのは肝臓でしょうか。

厚生労働省の示すガイドラインでは、節度ある適度な飲酒は1日平均純エタノールで20g以内とされています。20gとは大体「ビール500ml」「日本酒1合」「7%チューハイ350mL」「ウイスキーダブル1杯」「ワイングラス2杯」などに相当します。

飲酒はアルコール性肝炎の原因となり、進行すると肝硬変、肝不全となり肝臓がんのリスクも上昇します。各界著名人で肝硬変、肝不全、それにとまなう食道静脈瘤出血などで他界された方も多数います。また、肝炎だけでなく、高血圧や脳出血にも影響があることがわかっています。「酒は百薬の長」という言葉もありますが、20g以下なら必ずしも体に良いというわけでもありません。女性や高齢者、飲酒ですぐ赤くなってしまうような方は飲酒による負の影響が大きいとされています。また、週に2回は休肝日(飲酒しない)をつくることも重要です。

さて、飲酒とがんの関係はどうでしょうか？実は飲酒は喫煙につぐ第二の発がん要因なのです。欧米の研究では、1日エタノール摂取量12.5g(ビール250ml相当)以上でがんのリスクが上がるということがわかっています。さきほどの20gよりも厳しいラインです。飲酒によるがんといえば、前述の肝臓がん、食道がん、ちょっと詳しい方なら口やのどのがんが挙がってくるでしょう。しかし、乳がんや大腸がんのリスクも増加させるということはあまりご存知ないことと思います。

喫煙の健康への影響が問題視され各種規制が強くなったのはこの20年内外でしょうか。アルコールに関しては現在、喫煙ほどの規制はありませんが、いわゆるアルハラや、依存症などの問題も含め、喫煙に準じた社会的な取り組みが必要とされています。

まずは皆さん、ご自身の飲酒習慣を見直してみませんか？

当院は「敷地内全面禁煙」となっております

細胞診と細胞検査士

病理診断科 主任代行 臨床検査技師 山口 まどか

病院で患者さんが受ける検査には様々な種類があります。「エコー検査」や「血液検査」などは耳馴染みがあり、どんなものかなんとなくわかる、想像できる方も多くいらっしゃるかと思います。では「細胞診」についてはご存知でしょうか。私はこの細胞診を担当する「細胞検査士」という認定資格を持った臨床検査技師ですが、細胞診や細胞検査士に対して、一般の方だけでなく病院職員の中でもあまり認知度が高くない印象を持っています。ぜひ多くの方に知っていただきたく、ご紹介いたします。

細胞診は主にがんを見つけることを目的とした検査で、最も広く行われているのは子宮頸癌検診です。子宮頸癌検診では、ブラシなどの器具を用いて子宮頸部から細胞をこすり取り、それをスライドガラスに塗り付けます。細胞検査士はそのスライドガラスに染色を施し、顕微鏡で隅々まで観察します。そうするとたくさんの細胞が見えるのですが、がん細胞の見た目には正常細胞と異なる特徴があるので、それを見つけ出します。正常細胞しか見られない場合は、細胞検査士が陰性として結果報告を行います。がん細胞や、疑わしい細胞が見られる場合は、細胞診専門医が確認して最終報告がなされます。

子宮頸癌検診以外に細胞診の対象となるもの（検体）は、痰や尿など自然に排泄されるものや、お腹や胸に溜まった水を回収したもの（腹水、胸水）などがあります。また乳房や甲状腺（首の前面にある臓器です）など体の表面に近いところに病気がある場合は、直接そこに針を刺して細胞を採取することもあります。これらの検体もスライドガラスに塗り付ける方法以外の検査の流れは子宮頸癌検診と同じです。

細胞診は、その結果次第で患者さんが手術を行うなど、治療に直接影響することもあるので、細胞検査士は常に緊張感と責任感をもって検査に臨んでいます。がん細胞と一口に言っても見た目は様々で、臓器によっても特徴が違います。また正常細胞に似ている癌細胞があったり、逆にがん細胞のように見える正常細胞があったりします。さらに、がん細胞がごくわずかしか見られない場合もあります。それらを確実に見つけ出し区別するためには、細胞を探す技術とともに幅広い知識が必要です。そのため、細胞検査士の認定試験は難関となっており、毎年合格率は約 25%とされています。

細胞検査士は患者さんと直に接することはほとんど無く、病院の中で目立たない存在ではありますが、縁の下の力持ちとしてより良い診療を支えるべく日々顕微鏡と向き合っています。もし、診察の中で「細胞診」という言葉が出たときに、この文章が皆様のお役に立てば嬉しいです。